

# ウズリす



УзРис

文部科学省選定  
「私立大学研究ブランディング事業」

立正大学ウズベキスタン  
学術交流プロジェクト  
ニュースレター

2018.11  
第2号



調査活動報告 2018年9月ウズベキスタン学術調査隊

よりみちリサーチ1 ウズベキスタンの墓地(1)

よりみちリサーチ2 復活したサマルカンド・ペーパー

本の紹介 ウズベキスタンを知るための60章  
シルクロードを知る事典

博物館みて歩き サマルカンド郷土史博物館

みやげばなし ウズベキスタン民族帽「ドッピ」の紹介

# 調査活動報告

## 2018年9月ウズベキスタン学術調査隊

今回の活動の中心はズルマラ周辺の発掘調査でした。さらにレーザー 3D スキャンとドローンも使ったTVクルーによる遺跡撮影などもおこなうことができました。

また新たな企画である本学教員による日本文化講演会も聴講者に好評でした。

立正大学文学部 准教授  
(東洋史)、調査隊隊長 **岩本篤志**

専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。  
現地の食事はプロフ(パルフ)、ラプシャがおすすめ。



塔周辺の発掘前に記念撮影

## 報告

2018年9月の調査活動の目的は4つありました。

- 1.ズルマラ周辺調査(発掘調査、レーザー 3D スキャン、遺跡保全に関するワークショップ)
- 2.本学教員による日本文化講演会(於タシケント・テルメズ)
- 3.11月23日開催のシンポジウムに関する調整(招聘者、日本大使館)
- 4.活動の情報発信および取材活動(TV撮影、Facebook、ウズリス、ホームページ)

これらの内容については、6月29日に行われた調査隊の打合せでおおよそ決まっていました。ただ現地の各関係者との調整は必ずしも順調ではありませんでした。5月から数度にわたり先方にこちらの意見や情報をメールで伝えましたが、7月になってテルメズ考古博物館のゼブニソ館長異動のニュースが入り、彼女が発掘を主導できないことがわかりました。テルメズ大学側にも発掘調査に関するメールは送っていましたが、明確な返信はありませんでした。この点は大いに不安でした。

しかし、この不安は9月7日にテルメズ大学でシャイドラエフ教授と話すことで氷解しました。シャイドラエフ教授はただちに計画に沿った発掘の許可が得られるよう申請をおこなってくれました。

9月10日にはズルマラ周辺の試掘が開始されました。塔の毀損につながりかねない基壇部分にはあえて手を付けず、塔から20m以上離れた場所にトレンチが設定されました。発掘期間はわずか1週間でしたが、確かな一歩を踏み出せました。具体的には年度末の年次報告に示す予定です。

またシャイドラエフ氏の主導で、当方が希望していたとおり、遺跡保存に関する意見交換会ができました。その場にはテルメズ訪問中であつたピダエフ氏や博物館や州の修復の専門家、そして材料保存科学を専門とする筑波大学の松井敏也教授も出席しました。また別途、ウズベク観光庁の事務所とも、遺跡と周辺整備について意見交換しました。

またレーザーによるズルマラの3D スキャンの作業をおこないました。日本のライカジオシステムズからウズベキスタンの会社の紹介を得て、8月末にはほぼ手続きが済み作業も順調にすすみました。ただ支払い方法については不明な点が多くて、帰国後もその解決に時間を費やすことになりました。

またTV撮影(BS-Fuji、ガリレオX放映用)に伴い、ディレクターの森口氏からスルハンダリヤの遺跡をドローンで撮影したい旨、申し出がありました。

私はこれまでの経緯からアフガンに近い遺跡での撮影は不可能だと思いましたが、ウズベク側で業者を探してもらうことにしました。結果として、テルメズの遺跡でもドローンによる撮影ができました。世界初の撮影でしょう。

そして、交流事業として企画したテルメズ大学での日本文化講演会についても、100人程度の学生の参加を得て盛会でした。タシケント移動後には日本語を学ぶ学生向けとして同内容の講演会を平山郁夫国際文化キャラバンサライにておこない、80人程度の学生や社会人の参加を得ました。これについては講師の先生方や通訳の方々、テルメズ大学国際担当のエルキノビッチ氏とシャイドラエフ氏、名古屋大学の今村氏の協力・助言によるところが大きかったです。両講演会の講演者および内容は次の通りです。

渡邊裕美子(文学部教授)「日本の古典和歌(古典定型詩)の世界」

安田治樹(仏教学部教授)「日本の7~8世紀美術とソグド文化」

また、11月23日開催のシンポジウムに関わる調整に関しても順調におこなうことができました。結果として上掲の目的はすべて果たせました。協力していただいた方々全員にあらためて感謝したいと思います。

## 日程概要

凡例(敬称略、前出・本号執筆者の所属略)

- 1…島津弘(地球環境科学部教授)、原将也(地球環境科学部助教)
  - 2…岩本篤志、紺野英二、諏訪俊昭(文学研究科 院生)、高橋一生、森口郷志(TV製作(株)WAC)、本間幸幸(WAC)、岩木達也(WAC)
  - 3…安田治樹、渡邊裕美子
- ※…上記グループ以外の個人の宿泊地移動  
松井敏也(筑波大学 世界遺産専攻 教授、9/10~9/15)、今村栄一(名古屋大学ウズベキスタン事務所・サテライトオフィス 職員 9/9~9/11)

### 9/4(火)

- 1 タシケント: 入国(直行便)
- 2 タシケント: 入国(仁川経由)

### 9/5(水)

- 1 2 タシケント → サマルカンド: 高速鉄道、機材運搬、TV撮影

### 9/6(木)

- 1 2 サマルカンド → テルメズ: 小型バス、鉄門・ブズガラ-ハナ渓谷踏破

### 9/7(金)

- 1 2 テルメズ: テルメズ大学長棟で副学長面談、シャイドラエフ氏面談
- 3 タシケント: 入国(仁川経由)

### 9/8(土)

- 1 2 テルメズ: ズルマラ周辺試掘坑の位置を相談
- 3 テルメズ: 午後着。全員で日本留学希望者に面談

### 9/9(日)

- 1 2 3 テルメズ: スルタンサオダット → コキドルオタハナカ → カンピルテペ、見学・調査・取材 / 1 テルメズ → タシケント / ※今村 タシケント → テルメズ

### 9/10(月)

- 2 3 テルメズ: 分隊。ズルマラ周辺発掘初日(紺野・高橋・本間・岩木)。7:00発掘開始 → 13:00作業終了(他日も同時時間) / 講演会(安田・渡邊・岩本・諏訪・森口) 8:00大学着・準備 → 9:05開始、11:20終了 → シャイドラエフ氏と打合せ / 1 タシケント: 帰国(成田直行) / ※松井 タシケント: 入国(仁川経由)

### 9/11(火)

- テルメズ: 発掘2日目(滞在全員)。塔前で記念撮影、トレンチ西側の綿花畑に試掘坑設定。業者による3Dスキャン、ズルマラでドローン撮影 / ※松井 タシケント → テルメズ ※今村 テルメズ → タシケント

### 9/12(水)

- テルメズ: 分隊。発掘3日目(紺野・高橋・諏訪・岩木)。遺跡保全ワークショップ(テルメズ大、松井・安田・渡邊・岩本・森口・本間)。16:00 ピダエフ氏とカラテペでTV収録(安田・岩本・TVクルー)、カラテペにてドローン撮影



テルメズ大学での渡邊先生・安田先生の講演の様子

### 9/13(木)

テルメズ: 分隊。発掘4日目(紺野・高橋・諏訪)。塔東に4カ所目の試掘坑設定。アフガン風で10時過ぎ作業中止。気象観測装置故障判明 / テルメズ → デナウ: 安田・渡邊・岩本・TVクルー、ダルヴェルジンでドローン撮影、加藤の家取材

### 9/14(金)

テルメズ: 発掘5日目(渡邊・松井以外)。発掘トレンチ4カ所に増。文化財保護官来訪。気象観測装置からデータ取出。カンピルテペにてドローン撮影 / ※渡邊・松井 テルメズ → タシケント / ※松井 タシケント: 帰国(仁川経由)

### 9/15(土)

テルメズ: 発掘6日目(滞在全員)。現地TVの取材。午後、安田・岩本、観光庁スルハンダリヤ事務所訪問 / ※渡邊 タシケント → サマルカンド: 高速鉄道、取材

### 9/16(日)

テルメズ: 紺野・高橋・諏訪、ズルマラにて測量。岩本・安田、気象観測装置応急措置 → シャイドラエフ氏らと今後の打合せ / ※安田・岩本・TVクルー テルメズ → タシケント / ※渡邊 サマルカンド → タシケント: 高速鉄道

### 9/17(月)

テルメズ: 発掘7日目(紺野・高橋・諏訪)。掘削及び埋め戻し、作業員の給与支払い / タシケント: 分隊。TVクルーは市内取材 / 安田・岩本・渡邊は今村と合流、講演会場確認、通訳と打合せ → 岩本・今村、測量会社で3Dデータ確認

### 9/18(火)

タシケント: 安田・岩本・渡邊はアブドゥハリモフ氏面会 → ピダエフ氏、トゥルグノフ氏面会 → 国際文化キャラバンサライにて講演会15時開始、17時終了 / ※紺野・高橋・諏訪 テルメズ → タシケント、講演会合流

### 9/19(水)

- 2 3 タシケント: バザール見学 → 帰国(仁川着)

### 9/20(木)

- 2 3 成田: 帰国(仁川経由)



# ウズベキスタンの墓地(1)

## ～カンピル・テペ隣接 TASKENT・OTA墓地

立正大学文学部 教授(考古学)、  
副学長、調査隊副隊長 **池上 悟**

専門は仏教関係遺跡・遺物などの研究。  
ウズベキスタンの夏は暑いけれども、なかなか良いところもあります。

墓地はその土地の文化そのものであり、  
民族の伝統に基づいて造営されています。  
とくに遺跡あるいは、その周辺地に  
隣接する墓地に注目してみました。  
今回はテルメズ近郊シュロブに位置するグレコ・  
バクトリア時代の遺跡カンピルテペに隣接する  
墓地を紹介します。



カンピル・テペから墓地の方向を望む



墓地の入り口



ロシア人墓地



イスラム墓地



### 墓地調査の意義

考古学の調査は、墓地を最も価値ある遺構として重要視してきました。個別の墓は、埋葬の方法、副葬品の様相から、そこに埋葬された人物の生前の身分・地位を想定することが可能であり、様々な情報を知ることができます。

カラ・テペ遺跡の各地点からも埋葬された人骨が多数発見されています。

仏教遺跡としてのカラ・テペ遺跡は大河アムダリヤの北岸の砂岩の丘上に展開しており、南に高く北に従って低くなっています。南丘および西丘では砂岩を穿って信仰にかかわる洞窟遺構が構築されており、最終的には寺院としての機能を失った後に埋葬場所として利用されています。調査ごとに複数の人骨が発見され、副葬された土器・コインなどから埋葬年代が想定されています。

立正大学の調査隊が発掘調査した北丘の仏教伽藍遺跡の西側でも、僧侶が住まうNo.55の僧房が、後に埋葬の場所として利用されています。ここから出土した人骨を放射性炭素年代測定法によって測定したところ、541～652ADの年代が推定され、7世紀頃には僧房としての機能は失っていたことが考えられました。

遺跡あるいは、その隣接地に墓地が造営されている例は、遺跡見学時に多く確認できます。グレコ・バクトリア時代の遺跡として著名なカンピル・テペの隣接墓地、クシヤン朝の中心的な遺跡として重要な位置を占めたダルヴェルジン・テペでは内城が現在の墓地として利用されており、デナウ近傍のナマズガ遺跡は墓地として存在している現状です。

ウズベキスタンは土葬の国です。人が死亡すると、大地に墓穴を掘って棺に収納せずに埋葬する場合もあるよう

です。このことは偶々を目撃した葬送の列に死者を布で包み、複数の男性の肩に担われて墓地へ運ばれる状態から想定されます。

カンピル・テペに隣接するTASKENT・OTA墓地は、東側にロシア人墓地、西側に地元イスラムの住民の墓地と、自然地形によって明確に区分されており、墓地の様相が対照的です。

### ロシア人墓地の様相

ウズベキスタン共和国は19世紀に帝政ロシアの南下によってその支配下に組み込まれ、ソビエト連邦下ではウズベク・ソビエト社会主義共和国となりました。1991年のソ連崩壊後に独立してウズベク共和国となっています。

支配者階層であったロシア人は、国内南端のスルハングリヤ州の地まで移住し、死してアムダリヤを臨む崖上の平坦地の墓地に葬られました。

ロシア人の墓地には特徴的な墓標が建てられています。多くは鉄製の十字架形ですが、上が短く下が長い2本の横棒が並行して縦棒に組み合わされており、2本の横棒の下には更に斜めの棒も伴っています。

ロシア正教などで使用される八端十字架といわれるものであり、名前は8箇所の先端部分が存在することに由来しています。

多くは土葬した縦長の土饅頭を鉄製柵で囲っており、片方に八端十字架を建てています。

中には十字架に墓碑銘を記した看板を付設する例も認められ、1970年代の墓ではコンクリート製の三角柱状の墓標の上に小さな八端十字架を建て、墓標の正面に故人の写真や添える資料も確認できます。その後、墓石への故人の写真の添付はイスラム墓石にも及び、今や故人の容姿を彫刻で表す風潮が主体となっています。

### イスラム墓地の様相

地元ウズベクの住民はイスラム教を信仰し、埋葬もイスラム教に従っています。ロシア人墓地とは自然地形に従って区分された西側に広く展開しています。この状況からは、本来あったウズベク墓地の住民墓地に隣接してロシア人墓地が遅れて造営されたことが窺われます。墓穴を掘って土葬しており、土饅頭が累々と広がっています。多くは50～60cmほど土を盛り上げたのみであり、相対的に構築年代の降る墓には名前と生没年を記した墓誌を伴う墓が多く営まれています。

更に丁寧な墓は、煉瓦積みの大形の墓標を構築しており、この正面に墓誌を設え、上部にイスラム教のシンボルの三日月形を表現しています。

これらの墓は、隣接する相互の名前を確認すると、特定の家族の墓が集中

して造営されてはいません。欧州諸国における一般的な墓地と同様に、埋葬者個人を単位として造営されたものと思えます。

墓地はその土地の文化そのものであり、民族の伝統に基づいて造営されています。専ら経済的要因に基づいて、被葬者の生前社会における身分秩序を墓の構造に反映しています。単なる土饅頭から周りをレンガで区画したもの、更には大形の墓標を伴う例は時代性も顕著に反映しています。

ここカンピル・テペに隣接するTASKENT・OTA墓地では、墓標の状態によって窺われるところです。墓穴の掘り下げに伴って地下に埋蔵されていた土器片が地上に現れており、墓地の展開する地も紀元前のグレコ・バクトリア時代の遺跡であることが知られます。カンピル・テペに付随する墓地遺跡は明確ではありません。この地に営まれている可能性も高いものと思えます。



# 復活した サマルカンド・ペーパー ～コニギル・メロス紙漉き工房 探訪記

立正大学文学部 教授(文学)  
日本文化紹介のため調査団に同行 **渡邊裕美子**  
専門は和歌文学・中世文学。  
古くて新しい国ウズベクは魅力がいっぱい。



コニギル・メロス紙漉き工房

素晴らしい伝統をもちながら、いったんは途絶えてしまったサマルカンド紙。工房主ザリフさんの努力で復活した紙は、光沢があって暖かみがあり、和紙に通じるものがありますが、実は復活には和紙の技術も一役買っていました。



左：ザリフさんにインタビュー 中：サマルカンド紙の葉書 右：サマルカンド紙で作られた伝統的な女の子の人形

## コニギル・メロス 紙漉き工房

サマルカンドの中心部から東へ車を走らせれば、10分ほどでコニギル村に到着します。その一角に背の高い木立に囲まれて、コニギル・メロス紙漉き工房は建っています。傍らには豊かな水をたたえる小川も流れていて、その小川を利用する大きな水車小屋が工房の目印です。わたしがこの工房を訪ねたのは2018年9月15日。日中はまだまだ強い日射しが照りつけていましたが、木漏れ日が揺れる工房周辺には心地よい風が吹いていました。

## サマルカンド紙の 紙漉き工程

サマルカンド紙の原料は、養蚕に使

われる桑の木です。まず、適当な長さに桑の木を切り揃えて蒸した後、皮を剥ぎ、煮沸して水車を使って叩いて繊維をほぐします。それから糊を混ぜて紙を漉き、重しを載せて圧縮して脱水、そして自然乾燥させます。乾燥した紙をメノウ石や貝で磨いて光沢を出して完成です。

## サマルカンド紙の 衰退と復活

中国で2世紀に改良が加えられた紙の製法が、この地域に伝えられたのは8世紀のことと言われています。高品質の紙はコーランや細密画などに用いられて名声を得ていましたが、徐々に衰退して、民族の伝統を抑圧するソビエト体制下で完全に途絶えてしまいました。

その技術がどうやって復活したのか。

今回、工房主のザリフさんにインタビューできました。ザリフさんは、1991年の独立直後にブハラ州で開催されたユネスコの会議に出席されました。もともと伝統的なテラコッタ職人だったザリフさんは作品展示だけのつもりでしたが、そこでサマルカンド紙の存在を知り、復活を目指してさまざまな試行錯誤を積み重ねることになったそうです。その過程で、JICAの事業を通して日本の紙漉きの技術も導入されています。当初は、ここまで大きな事業になるとは思わなかったというザリフさん。今後は、この工房を、紙以外の地元の名産品を販売したり、伝統料理プロフをサービスしたりする複合的な施設にしたいと夢を語ってくださいました。

なお、サマルカンド紙については『ウズベキスタンを知るための60章』所収 山田文氏のコラム参照。

## サマルカンド・ペーパーができるまで



**1** 桑の木の皮を剥ぐ  
紙作りに使うのは、堅い皮の内側の柔らかい皮です。



**5** 圧縮  
漉いた紙の上に木製の押さえを置き、さらに重しの石をのせます。



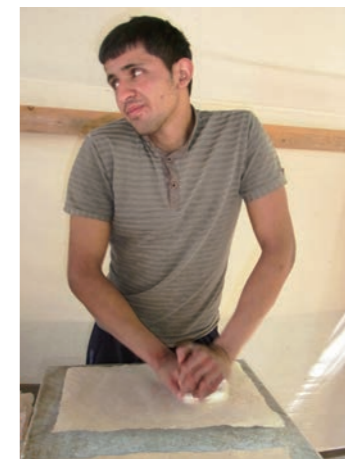
**2** 煮沸  
煮込むと繊維が柔らかくなり、ちぎれやすくなります。



**6** 天日干し  
まだ濡れている紙を板に貼り、自然乾燥させます。



**3** 杵で叩く  
訪問時は水車小屋が工事中で、人力で叩いていました。



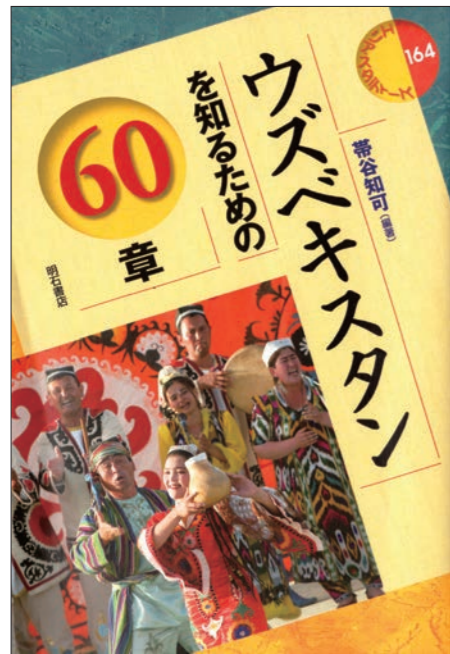
**7** 研磨  
乾燥させた紙の表面を石や貝を使って丁寧に磨きます。



**4** 紙漉き  
箕粉(すげた)を揺り動かして、原料が均等になるようにし、水を切ります。



**8** 日本から寄付された研磨用のメノウ石と貝  
研磨によって紙に光沢が生まれ、なめらかになってペン先が引っかかりなくなります。



## ウズベキスタンを知るための60章

帯谷知可 編著

明石書店  
2018年5月



## シルクロードを知る事典

長澤和俊 編

東京堂出版  
2002年7月刊

### ウズベキスタンの歴史、地理、人を知るための総合案内

ウズベキスタンは2018年時点で独立して28年になる国である。同時にその領域内からは、2、3世紀に活躍したクシャーン人や4～8世紀に活躍したソグド人の遺跡などが多数発見されており、独立前はイスラム教を原則認めないソヴィエト連邦のもとにあった。しかし、現在のウズベキスタンにはイスラム教徒が多く、クシャーン人やソグド人の言語を使う人はいない。では彼らはその国土にある遺跡や地域出身の人物を自国の歴史にどのように位置づけているのか。異国人である私にはその歴史認識のあり方は以前から興味深いものだった。また、現地を何度か訪れて、ウズベキスタンの人と何度かやりとりをして、地域社会の構造や学校教育システムはどうなっているのかなどたくさんの疑問と興味を持った。

本書はウズベキスタンの自然地理、歴史、生活、文化、政治経済などを知るのに最適であるばかりでなく、上述のような疑問に答えてくれる書籍である。ウズベキスタンに旅行する人のガイドに

もなるし、ウズベキスタンの何かを学問の対象にする人にも役に立つだろう。

本書は60章と10のコラムから成っており、それらはそれぞれ以下の6項目の下にまとめられている。「I 大地と人々」「II 歴史」「III 暮らしと社会」「IV 文化・芸術」「V 政治・経済・国際関係」「VI 日本とのかかわり」

残念ながら全ての章名、コラム名を記すだけで本稿は規定字数を超えてしまう。一部を例示することにしよう。

私が上記した歴史認識のあり方に関する疑問に対しては、「第9章 ティムールとティムール朝」や「コラム4「ウズベク」はどこから来たか」、「第16章 歴史的英雄を語り、描く」などでその見通しを立てることができる。実はティムール朝を征服したのが「ウズベク」であるが、その「ウズベク」や「ティムール」を現在のウズベク人はどのように認識しているかが解説されている。

また地域社会の構造については「第20章 マハッラ」が手がかりになる。

我々がしばしば畑や農村に散在している遺跡を見学に行くと、子供たちがついてくる。親たちは我々異国人の来訪をどういふ視線で見ているか、という点から地域の結びつきのありようが気になっていた。また教育制度については「第29章 教育」から情報を得られる。小中高は4・5・3制で日本の高校に当たる部分までが義務教育になっているという。

また今号のニュースレターで渡邊先生が写真を豊富に用いて紹介するコニギルメロスのサマルカンド紙についても記事がある。(コラム3 サマルカンド紙の復活)。そして「第58章 ウズベキスタンの仏教遺跡と日本—日共同発掘調査の成果」は、故加藤九祚先生の執筆で、本学のカラテペヤズルマラの調査にも言及してくださっている。是非本書を手にとりていただきたい。

立正大学文学部 准教授 (東洋史)、調査隊隊員 **岩本篤志**  
専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。現地のビールはサルバストとバルティカ3がおすすめ。

### シルクロードを机上で楽しむ人も現地に旅する人にも便利な入門書

上記の文句は本書新刊時の帯に記されたキャッチコピーである。さらに紹介文が「オアシス路を中心に遥かトルコまでの道、そして草原の道・南海の道、シルクロードを巡る国々の歴史、人と物の交流など幅広く紹介」とある。

本書は8つの大項目で構成される。

- シルクロードとは
- シルクロードの探検史
- シルクロードをめぐる国々
- シルクロードの歴史—
- ステップ路と南海路
- 仏教伝来の道
- オアシスの道
- 河西から新疆へ—
- パミールの彼方へ
- タリム盆地から西アジアへ—
- 東西文化の交流

この大項目(章)のもとに310の小項目があり、編者を含む研究者17名の記名記事となっている。また、ほぼ全ページに記された写真や地図などが読者の理解と想像を大いに助けてくれる。

本書はいわば「読む事典」であり、関心のある地域やテーマについて、体系的な基礎知識を得ることができる。例えば〈仏教伝来の道〉の章では「仏教の東漸」「アショーカ王とそれ以後」「ガンダーラ美術の成立」…など38項目が並ぶ。記述は平易で、難読文字や固有名詞にはふりがなが付されている。

立正大学の展開するウズベキスタン学術調査との関連でいえば、〈パミールの彼方へ〉の章の、「タシケント—中央アジアの工業都市」「サマルカンドとピヤンジェント」「ブハラとヒワ」「シャフリ・サブズと鉄門」「テルメズ—多くの仏教寺院址」の諸項目が該当する。

アレクサンドロス大王の東方遠征に由来して、ギリシア人がバクトリア王国(前255年頃-前130年頃)を建てた。その本拠地は、本学調査隊の調査を含む現ウズベキスタン最南部と、現アフガニスタン北部を合わせた地であり、地域名でバクトリアやトハリスタンと呼ぶ。かの王国は北方の騎馬遊牧民によって滅ぼされたが、やがてこの地にクシャーン

ナ朝(1-3世紀)が興り、インド北部まで支配を広げた。仏教はこの王朝で一大転機を迎える。

仏像や大乘經典の出現については、近年も新たな学説が唱えられている。クシャーン朝を建てた遊牧民の非インド的文化が背景にあったとする見解も見逃せない。最古のブツダ像ともいわれる、法輪を転がす人を刻んだコイン(前1世紀か)も、この地のティリア・テベ遺跡(アフガン北部シバルガン市近郊)から出土している。本書でそこまでの言及がないのは残念だが、要注目地なのである。

われわれ日本人の仏教にも密かに息づく、シルクロード上の諸要素。そのルートの案内役として、本書は格好のツールであるといえよう。版元品切だが多くの公立図書館に所蔵されているので、ぜひ手にとりてほしい。

立正大学仏教学部 教授 (東洋史・仏教史)、調査隊隊員 **手島一真**  
専門は中国南北朝隋唐時代の仏教・宗教社会史。アレクサンドロスも通った鉄門址は必見。ビーツのヨーグルトサラダはピカイチでした。



ウズベキスタン  
サマルカンド

博物館みて歩き

## サマルカンド郷土史博物館

立正大学文学部 講師 (博物館学)、調査隊隊長 **紺野英二** 専門は考古学、南武蔵の古墳。体調の悪い時はウオッカを飲めといわれたが、おすすめはスイカとメロンと青い空。

今回はサマルカンドの博物館を紹介します。

サマルカンドの博物館といえば、「アフラシアブ」にある歴史博物館が有名です。歴史博物館は、イッシュヒドの宮殿遺跡から発見（1965年）された壁画が展示され、サマルカンドの観光スポットとしても外せないところ。しかし、今回紹介するのはその有名な方ではなく、サマルカンドにおける地域博物館の一例を紹介します。

サマルカンド郷土史博物館は、2階建てのレンガ造りの建物です。周辺は住宅に囲まれ、民家の入口のようなおもむきの門扉を抜け、少し奥へ進むと、博物館の入口です。この建物は19世紀末の建築ともいわれ、民家を改装して地域博物館としています。こうした事例は、わが国でもみられますが、この建物は、床面などにも大規模改修の痕跡がみえない稀有な構造といえます。

この博物館では、1階は、サマルカンド周辺の地理・考古学・民俗の展示、2階では、植物標本や動物の剥製など

による自然史に関する展示をおこなっています。

資料は壁面や造作による間仕切りを利用し、「平ケース」（いわゆる「覗きケース」のこと）も壁面に打ち付け固定されています。平ケースの下部は、露出展示スペースです。とくに石製品や岩絵などを移設し、露出展示しています。岩絵は、岩の表面を削り動物などを描いたもので、中央アジアにしばしばみえるものです。展示品は、サマルカンド市近郊で発見されたもので、一対の角の表現から山羊と想定できます。解説には、前3000～1000年とあるので、旧石器時代のものでしょう。

次に、民俗展示室へすすむと、室内の大半を占める造作模型が目に入ります。模型は、原寸を6割程度に縮小したもので「昔の暮らし」の展示です。民家の入口やレンガ敷の家畜小屋、タンドール窯なども造られています。また、無花果や唐草模様の刺繍を施したスザニも展示しています。

郷土史博物館の展示資料では、三彩

陶器の壺に注目しました（10～12世紀のコーナーに展示）。

三彩は、白（乳白色）、緑、黄の三色の釉薬を使用した陶器で、日本では、唐三彩や奈良三彩という名で知られています。奈良三彩が模倣した対象は、唐で作られた（7世紀～8世紀）焼き物、唐三彩です。かつて唐三彩は、墳墓から発見されたことから明器（副葬のための器）と考えられていました。しかし、その出土事例が増加したことにより、輸出商品と考えられるようになりました。シルクロードの東の終着点とされる日本では、唐三彩は模倣されただけでありませんでした。沖ノ島や太宰府、奈良の大安寺では長頸壺や陶枕などが発掘されています。壺のほか馬やラクダに乗った人物などさまざまな器種をもつ三彩は、西アジアに運ばれイスラム三彩の興るきっかけとなったといえます。

鮮やかな三色の釉薬は、中央アジアを経てヨーロッパの人びとの心をも魅了したことでしょう。

## 趣旨説明

『ウズリす』は、文部科学省私学研究ブランディング事業「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」の広報誌です。立正大学ウズベキスタン学術調査隊の活動を通して、ウズベキスタンの文化や人びとを紹介し、詳しくは創刊号をご覧ください。

## お知らせ

### シンポジウム 「文化遺産国際協力のかたち —世界遺産を未来に伝える日本の貢献—」

2018年10月8日、日経ホールにて開催されたシンポジウム（主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁）にて、本学の調査活動をポスターにて紹介していただきました。

### ■これからの活動予定

2018年9月15日(土)～12月25日(火)

### 特別展 「シルクロード新世紀—ヒトが動き、モノが動く—」

古代オリエント博物館・池袋サンシャイン文化会館7F  
本学の調査活動をポスターにて紹介中

### 2月末

2018年度調査活動報告会（立正大学・品川キャンパス）、  
※聴講無料・事前申請不要

### ドキュメンタリー番組「ガリレオX」 「文明の十字路で仏教遺跡を発掘せよ —ウズベキスタンの仏塔を探る—」

BSフジの番組にて、本調査隊の活動が紹介されました（本放送2018年10月28日(日) 昼11:30～12:00）。またテレビ神奈川等で再放送される予定です。わかり次第、Facebook、ホームページにて告示します。

11月23日(金・祝) 午前10時～午後17時

### シンポジウム 「シルクロードの歴史・考古・美術」

立正大学 品川キャンパス 石橋湛山記念講堂  
※聴講無料・事前申請不要

### 3月上～中旬

春期調査（ズルマラ環境調査・発掘準備）、  
現地にて日本文化講演会を予定

※このほか、随時、講演会などで調査の成果をご報告していきます。詳細はわかり次第、Facebook、ホームページにて告示します。

## 編集後記

9月の調査では大きな成果を得ることができました。調査活動報告等をご覧ください。年度末に向けて出版物や活動も目白押しです。次号は6月刊行予定です。(A)

### 「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」スタッフ

- ◇事業責任者 …… 池上 悟（文学部 教授・副学長）
- ◇研究ブランディング担当 …… 永井 智（心理学部 准教授・学長補佐）
- ◇調査隊隊長 …… 安田治樹（仏教学部 教授）
- ◇プロジェクトリーダー …… 岩本篤志（文学部 准教授）
- ◇主管部局 …… 研究推進・地域連携センター／研究推進・地域連携課
- ◇関係部局 …… 広報課

### ウズベキスタン学術交流プロジェクトニュースレター

- ◇編集委員 …… 岩本篤志、紺野英二、手島一真

文部科学省 私学研究ブランディング事業  
「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」

## ウズリす 第2号

2018年11月23日発行

編集・発行  
立正大学 ウズベキスタン学術交流プロジェクト  
ニュースレター編集委員会

〒141-8602  
東京都品川区大崎4-2-16  
立正大学 研究推進・地域連携課

<http://www.ris.ac.jp/branding/about.html>  
<https://www.facebook.com/RisshoUniv.Uzbekistan/shien@ris.ac.jp>

印刷 株式会社 ダイヤモンド・グラフィック社

## ウズベキスタン民族帽「ドッピ」の紹介

私は2018年9月の調査隊に参加して、テルメズ郊外に分布する仏教遺跡であるズルマラの発掘調査や古都サマルカンドや首都タシケントを訪れました。ウズベキスタンに15日間滞在していたこととなります。滞在中、バザールや百貨店でウズベキスタンの民族帽であるドッピを購入しました。そのドッピについて紹介したいと思います。

まず、ドッピはウズベキスタン人がかぶる民族帽です。性別によって帽子の外側の柄が異なり、女性用は花柄やカラフルな刺繍が施された帽子が特徴的です。一方、男性用は黒地に唐辛子をモチーフとした柄を白抜きにしたシンプ

ルな帽子が特徴的です。内側には柄が施されていません。上部には通気孔があるため、1日中かぶっていても違和感はありませんでした。生地は綿やフェルトで、値段は20000～50000スム(日本円に換算すると、約300～700円)とお手頃です。結婚式や祝賀会などで用いられる高価なものは、金糸を使用しているそうです。

男性用ドッピの唐辛子をモチーフとした柄は、疫病にかかった際、唐辛子を食べたことで治癒したことに由来するそうで、帽子上部に唐辛子、下部に唐辛子の種が表現されるようになりました。また、女性用ドッピの花柄やカラフルな刺繍の由来は不明ですが、トルコの民族帽と類似するため、その由来は西アジアの方にありそうです。

次に、タシケントで1つとテルメズで2つ購入したドッピの紹介をしていきます。

タシケントのドッピの柄は、上部に唐辛子と種が3つ表現されており、中央の種は雪の結晶状で、4面に施されていま

す。下部には白いラインと二重の四角内に二重線と種が表現されたものと、二隅に種が1つずつ表現されたものが、4面に施されています。

一方、テルメズの男性用ドッピの柄は、エビの形状をした唐辛子で、下部に種が表現されており、種がぶら下がっているようにも見えます。これが4面に施されています。下部には幾何学模様のラインがあり、その上に隅丸方形が表現されています。

また、女性用ドッピは、橙・赤・青・緑・白・ピンク・黒の7色を使用しており、模様は何をかたどったか不明ですがカラフルな刺繍です。なお下左4点はタシケントで同行者が購入しました。

以上、タシケントとテルメズのドッピの紹介でした。男性用のドッピのモチーフである唐辛子模様の形が地域毎で異なる点に興味を持ちました。また、ドッピを購入して滞在中かぶっていましたが、全く違和感がなく心地よかったです。他地域のドッピも入手してみたいものです。



上: 通訳さんと 下左: カラフルなドッピ 下右: 唐辛子のドッピ2種と女性用 (本文参照)